

Beowulf に見える Infinitives

宮 田 武 志

序

Franz Bopp が1816年に *Conjugationssystem der Sanskritsprache* で、古い印欧語族における infinitive は、もと、nouns of action が凝固し、化石化した諸格であるとの結論に達して以来、それは今日では広く承認せられているのであって、古い印欧語族における前述の諸格は、主として locative, dative, accusative であった。それでは印欧語族の一支派である Germanic 語派における infinitive forms の歴史は、英語をも含めて、どうであったかと言うと、Joseph Wright (*Old English Grammat*, § 480) がそれを要領よく説明している、すなわち、primitive Germanic にあっては nouns of action の suffix の -ono に nominative-accusative neuter ending の -m が加わったものが一般化し、この -onom が Old English, Gothic, Old Saxon, Old High German では規則的に -an になり、primitive West Germanic では infinitive は ja-declension の noun のように inflect されて、genitive (-ennes), dative (-enne) を有したが、genitive は prehistoric OE の時代に消滅し、dative の -enne は -an の影響で一般に -anne となり、Anglo-Saxon では infinitive は二つの形を有するのみとなった、すなわち、

(1) neuter verbal noun の petrified nominative-accusative case に起源を有し、-an で終る uninflected (or simple) infinitive—e. g. beran.

(2) neuter verbal noun の petrified dative case に起源を有し -anne (-enne で終り、前置詞 to をもつ inflected (or to-) infinitive—e. g. to beranne.

(1)の form は、例えば writan に於て、writan>writen>write と変化し、(2)の form は writanne>writenne>writene>writen>write と変化し、このような levelling の過程を経て、結局両者同一の形に帰着したことは周知のところである。

Jespersen (*MEG*, V, 11, 1²) は OE poetry においては to-infinitive が subject, object として用いられた例は見られないと述べているが、本稿も Beowulf に見える19の inflected infinitive の何れについても、名詞的用法を認めない立場をとっている。ところが OE の prose に見える inflected infinitive については、かなり早い時期の使用例についても、その名詞的用法を認めようとする解釈が一般的である。例えば OED は、OE の時期に、論理的には simple infinitive を用いるべきに拘らず、to-infinitive が indirect nominative⁽¹⁾ として名詞的に用いられる special idiomatic use が行われたとなし (s. v.

'To' B. 'To' before an infinitive. History.), そのような special idiomatic use における to-infinitive の最も早い例として, C 890 tr. Bæda's. Hist. Pref. (1890) 2 : Forþon hit is god godne to herianne and yfelne to leanne. (For it is good to praise the good and blame the bad.) を挙げているのであって (s. v. 'To' B, III, 13, a), これによれば OE の散文における to-infinitive の名詞的用法は, 早くも第 9 世紀には見られることになる。このように to-infinitive の名詞的用法を促進した要因としてはさまざまなことが考えられるが, その内でも注目すべきは, OE には他動詞としても自動詞としても用いられる動詞, すなわち, onginnan 'to begin', ondrædan 'to dread', bebeodan 'to bid', bewerian 'to forbid, prevent', geliefan 'to believe', þencean 'to think' のように, それに simple (accusative) infinitive が後続することもあるし, to-infinitive が後続することもある動詞が存在したことである。

このようにして, 時代が降るにつれて, 名詞としての simple infinitive はますます to-infinitive に取って代られ, ドイツ語, フランス語などでは今なお simple infinitive が名詞として用いられているのに対し (e. g. Handeln ist leicht, denken schwer, ...=Act is easy, think is difficult, .../ Vouloir, c'est pouvoir, =Wish, that is be able.), 英語においては, 助動詞と共に用いられる場合や All I can do is go my own way. のような Americanism は別として, 名詞としての simple infinitive の使用は極めて限られたものとなり (e. g. old saws : Better bend than break. / Better ask than go astray. <We had better bend, ask than...), 名詞としての infinitive としては to-infinitive が一般的となると共に, to は前置詞であることが忘れられて, 多くの場合, 単に infinitive の empty な sign として添えられるに過ぎなくなった。Jespersen (MEG, V, 10. 24) が To walk with her is a great pleasure. の to walk の to を a walk, the walk との対比において一種の verbal article と見ていることは周知のところである。

Beowulf の全篇を通覧するに, **I** inflected infinitive の使用例は19回に過ぎず, **II** 残りのすべては uninflected infinitive であり, **II**の用例としては, (1)助動詞と共に用いられる場合, (2) uton, wutun と共に用いられる場合, (3) verbs of motion, etc. と共に用いられる場合, (4) impersonal statement における主語として用いられる場合, (5)一定の動詞の目的語として用いられる場合, (6)いわゆる accusative with infinitive を形づくる場合の 6 種類に類別することができるのであるが, **I** についてはすでに日本英文学会の英文学研究 Vol. XXXII, NO. 1 で論じており, **II** の(2), (3)については広島大学英文学会の英語英文学研究第六巻第二号で論じたので, 本稿においてはこれらの項目は割愛し, ただ**II**の(1), (4), (5), (6)についてのみ論じることにする。

注(1) Cf. Non est bonum hominem esse solum. — Latin Vulgate, Genesis 11. 18 (= It is not good for a man to be alone.) / But it is good a man ben at his Iarge. -Chaucer, The Knightes

Tale 1430 / To know my deed, 't were best not know myself. Shakespeare, Macbeth, 11. ii. 73

II, (1)助動詞と共に用いられる場合

cunnan (=know how to, be able to; 50, 90, etc.), durran (=dare; 1462, 1468, etc.), magan (=may, can; 190, 207, etc.), motan (=may, murt; 347, 2886, etc.), sculan (=must, shall; 20, 384, etc.), ðurfan (=need; 157, 445, etc.), willan (=desire, will; 68, 200, etc.) などの助動詞はもとは本動詞として transitive な意味をもち、従ってそれに続く simple infinitive はもつこれらの助動詞の目的語たる性格を有していたことは言うまでもないが、これらの助動詞の transitive な色彩が薄れてゆくに従い infinitive の predicative な性格が次第に確立せられた。もっとも、Jespersen (MEG, III. 1. 3.) がこれらの場合の simple infinitive を object と見ていることは周知のところである。

(4) impersonal statement における主語として用いられる場合

最初に、impersonal statement という名称を敢えて用いる理由について述べておこう。通常、impersonal construction と呼ばれるのは、天候・時・距離を示す場合を別とすれば、文法上の主語が示されないか (e.g. me þyrste 'me thirsted'), それを示されても、それは単に文の体裁を整えるための、意味内容の定かでない hit (it) であって、一定の客体に対して一定の動作(状態)を惹き起すところの、実質的な動作主(agent)は漠として捕捉し難く、歴史的に受け継がれて来たところの、常に third person singular の一定の動詞、常に is, wæs (was) に後続する一定の形容詞が用いられる construction のことであり、そこにおいては、もと、実質的な動作主はその動作(状態)が third person sing. で表わされるべき何ものかであることを示唆しながらも、文法形式としては、いわば主述未分化のまま、その一定の動詞, is, wæs+adj. を投げ出して、一定の動作・状態を端的に示そうとする表現方法である。ところが本稿で謂う所の impersonal statement は、文法形式を離れて意味論的な立場に立ち、いわゆる impersonal construction の面積を拡大し、たとえ文法上の主語が (pro) noun, infinitive, gerund, clause の形で示されていても、実質的な動作主が明かでなく、歴史的に定まった非人称動詞、形容詞を用いた一切の陳述のことであって、それは、溯って固有の impersonal construction に還元され得るものである。(1) (It) likes me in bread (or with respect of bread) > (2) Bread likes me, (> (3) I like bread) において、もはや personal construction へと変質していると見られるべき(3)は別として、文法的には noun の主語が用いられてはいるが、意味論的に容易に(1)の impersonal construction に還元される(2)は、本稿に謂うところの impersonal statement の範疇に入るべきものである。この点に関し、Skeat (The Complete Works of Geoffrey Chaucer, s.v. 'lyke' in Glossary) が us lyketh you を it pleases us with respect of you と注しているのは示唆的であり、この観点に立って、

impersmal constructim の典型とも見られるべき文例を挙げれば次のとおりである。

OE ① Her is min cnapa, ðone ic geceas, min georene, on þæm wel gelicode minre sawle. —Matt., 12. 18/ ② and hine ongan wel his worda lystan. —Gregory's Dialogues (q. Wyatt's A.S. Reader)

ME ③ But, Lord Crist ! whan that it remembreth me Upon my yowthe, and on my jolitee, It tikleth me about myn herte rote. —Chaucer, Wife of Bath's ProL. 469-71/
④ Me reweth sore of hende Nicholas. —ibid., Miller's Tale, 3462/ ⑤ of gurlles... gretliche me dremed. —Langland, Piers Plowm., C. xx1. 6/ ⑥ me ruys of thy hurtys. —Malory, Morte d' Arthur, 211. 27/ ⑦ whanne his fasste forðedd wass ða lisste himm affterr fode. —Ormulum, 11334.

ModE ⑧ let it repent thee concerning thy servants. —Psalms, 90. 13/ ⑨ Of night and loneliness it recks me not. —Milton, Comus, 404/ ⑩ at first in heart it likes me ill. —Scotl, Marmion, VI, xv.

German ⑪ Mir erbarmt deiner. / ⑫ Es behlt ihm an Fleisch. / ⑬ Es mangelt mir an Geld. / ⑭ Mir ist schlecht zu Mute. (od. zumute.) / ⑮ Mir ist mir bang vor ihm. / ⑯ Es gefällt mir in diesr Stadt. (①視よ、わが選ぶたるわが僕、わが心悦ぶ我がいつくしむ者—minre sawle=fem. dat. / ②彼は彼の言葉をいたく喜び初めき—worda = neut. pl. genitive. これが ME では分析的になって、aboute, of, after などをとるようになる。cf. ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦/③しかし、まあ、わたしの若い時に楽しく遊び暮らしたことを憶うと、心の根元がくすぐられるような気がします/④ニコラスさんがたいへん気の毒だ/⑤わたしは子供たちの夢をふんだんに見た—'gurlles' here means children, cf Chaucer, C. T. prol. 664, the yonge girles. / ⑥わたしはお前の傷が気の毒だ/⑦断食が終ったとき、彼は食物を食べたいと思った/⑩わたしはお前が気の毒だ/⑫彼は肉が足りない/⑬わたしは金がない/⑭わたしは気分がわるい/⑮わたしは彼が恐しい/⑯わたしはこの町が好きだ)

序ながら、it, impersonal verbs と to-infinitive, that-clause が用いられている構文の性格の解釈についての諸意見の一端を述べれば次のとおりである。 Poutsma (Gram. of Late Mod. Eng., Pt. II, Sect. II, p. 8, p. 354) は、'It is necessary that he should exert himself', 'It took him a long time to write that letter'. というような文における it は、well-defined notion 有する personal pronoun であるという原則論を示しつつも、時には it が personal であるのか、impersonal であるのか決定し兼ねる場合があるとして、'It takes no wiseacre to see that cordiality between France and England is the best guarantee of European peace'. —Manch, Guard, VIII, 17, 322 b. という文を示し、この文の it は infinitive を代表しているようにも見えると同時に、infinitive が adverbial function をもち、従って it は impersonal であるようにも感じられるとして、このような疑わしい場合をも含めて、'personal' という語に対し 'non-personal' という語を用いるのが便利だとしている。また、Onions (Adv, Eng. Syntax, 194) が、'It is

easy to write'. という文において, two possible ways of analysing があり, 'it' を Formrl Subject, 'to write' を Subject とみる見方と, 'it' を Subject, 'to write' を adjunct とみる見方との両者が可能であると述べているのも, 上述の Poutsma の言うところと同じような趣旨であろう。更に, Wyld (UED) は, 'It only takes five minutes to walk there', 'It takes many men to build a house'. のような文の it を impersonal と解し, Hornby, etc. E. E. Dic. は It takes two to make a quarrel'. のような文を impersonal construction と解している。

OED(s. v. 'It' 3, 4) が impersonal な it と, 'logical subjects'を代表する'provisional' or 'anticipatory' subject としての it とを区別する原則を立て, 疑わしい場合(e. g. s. v. Behove 4 :—W. Irving : It behoved him to keep on good terms with his pupils.) を, 更に一般的に言えば, 純粹に impersonal とは言えないと考えられる場合を quasi-impersonal と呼んでいるのは周知のところである。すなわち, physical or mental affection を表わす impersonal construction はしばしば affecting cause を表わす clause を伴うが (e. g. 'It pleases me when he does well. '), その clause が adverbial clause たるに止っている間はまだその文で用いられている it は impersonal であるが, このような文型はやがて logical subject である noun-clause, infinitive, noun 等を伴う personal construction へと移って行くと言うのである。しかしながらこの立場は OED において必ずしも全面的に貫かれてはいないのであって, 例えば 'It' 4b で c 1369 Chaucer, Dethe Blaunche 805 : Hit Happed that I came on a day Into a place, を personal として挙げておきながら, これと全く同一の構文である, c 1410 Maundev. (Roxb) xxv, 118 : If it hapne ðat any man...dye by the way. を 'Happen' lb で impersonal の一例として挙げているのであって, 以て言うところの personal と impersonal との border が如何に漠たるかを知るべきである。

impersonal stbtement について的一般論はさておき, Beowulf の text にもどれば, Beowulf には, 1793 : Geat unigmetes wel, rofne randwigan restan lyste ; (=Exceedingly much rest listed the Geat, the brave shield-warrior ;) のように, restan という uninflected infinitive を subject とする impersonal statement が見える。この文が (It) listed the Geat the brave shield-warrior exceedingly much in rest (or with respect of rest.) のような impersonal construction に還元され得ることは言うまでもないが, ここで注目すべきは,

(1) uninflected infinitive が impersonal statement の subject として用いられていること,

(2) impersonal verb の lyste の object として Geat, rofne randwigan という accusative が用いられている,

という点である。

(1) uninflected infinitive が subject として用いられている impersonal statement は OE, ME, ModE を通じて少なくないのであって、その数例を示せば次のとおりである。

OE Me geþuhte...*writan* þe. — Luke 1. 3 (=It seemed good to me...to write unto thee.) / Ðus unc gedafenað ealle rihtwisnisse *gefyllan*. — Matt., 3. 15 (=Thus it becomes us to fulfill all righteousness.)

ME him liste *ryde* so ; —Chaucer, Canterbury Tales, Prol, 102 (=Riding listed him so much,) / *wende* me bihoues...—Sir Gawain and the Green Knight 1065 (=it behooves me to go .../ me burde *be excused*. —Ib., 2428 (=I ought to be excused.)

ModE Which...Behoves me *keep* at utterance. — Shaks., Cymbeline III. i. 72-3/ Me lists not *tell* what words were made. —Scott, The Lay of the Last Minstrel, 5. 25

(2) impersonal verb が accusative の object をとることも OE では少なくないのであって、その数例を示せば次のとおりである。

Hyne hingrode. —Luke, 4. 2 (=He hungered.) / Cume to me se þe *hine* þyrste. —John, 7. 37 (=Let him come to me who may thirst.) / þa *hine* sio þrag becwom—Beowulf, 2883 (=when the time of hardship came upon him) / *Hine* ridan lyste. —Boeth. 34. 7 (=Riding listed him.)

ON の *dreyma* 'dream' という impersonal verb の場合には、 *mik dreymdi draum* (=me dreamed a dream) というように目的語として二つの accusatives をとるのが regular construction であり、OED (s. v. 'Dream', v.,² 3) は OE の *drieman* の場合もそうであろうと推定しているのであるが、これを一般的に言って、印欧語族において impersonal verbs がもともと如何なる case を支配したかということは、Mätzner (op. Cit., Zweiter Theil, S. 198) の言うように、興味なしとしない。

OE においては、accusative, dative の名詞が動詞に後続する場合、それらは動詞の目的語としての性格をもつと同時に、他面, in the direction of という意味を含むものとして、一定の動作乃至作用の向う方向を示す副詞的な機能を持ち、この方向を示す副詞性で以て先行の動詞を modify するという観点からすれば、accusative と dative との差異は殆どこれを全く認め難く、この両者はある程度、相互代替性をもっていたと考えられるのであって、これを動詞の側から見れば、OE における動詞の自他の区別は、今日の言語感覚を以て彼此截然と分類することは困難であり、動詞は謂わば自他未分化の状態にあったものと考えられる。OE における accusative と dative の相互代替性、動詞の自他の区別のあいまい性は、*aliefan* 'allow', *folgian* 'follow', *sparian* 'spare', *swelgan* 'swallow' というような、accusative と dative の double regimen の動詞の存在したことから察せられるし、また、*onginnan* 'begin', *ondrædan* 'dread', *bebeodan* 'bid', *bewerian* 'forbid', *geliefan* 'believe', *þencan* 'think, intend' のような、transitively (i. e. with acc. uninflected infinitive) にも intransitively (i. e. with adverbial inflected infinitive)

にも用いられる動詞が存在したことから察せられるし、さらにはまた、今日の言語感覚からすれば当然 accusative が後続すべき beorgon 'protect', onfon 'receive' に dative が後続したことから察せられ、動詞の自他の区別のあいまい性は、当然 accusative が後続することが予想される abidan 'awati', bidan 'await', helpan 'help' などに genitive が後続することからも察せられるのであって、この最後の場合、元来 with regard of の意味を含むところの、関聯を示す副詞としての機能をもつ genitive の noun を、'genitive object' として先行動詞の目的語とみる見解が一般的である。

注 (1) impersonal verbs として挙ぐべきは、天候・時・距離を表わす動詞の外には、肉体的諸感覚、精神的諸感情、義務・必要、事象の生起、事象・事物の蓋然性・重要性・妥当性・適否・利害関係等々を表わす動詞、更に is, wæs 'was' に上記の諸性格を表わす形容詞が結び付いた形、などに大別することができる。

OE における impersonal verbs の一端を票すならば次のとおりである。
alimpan 'happen', apreotan 'be weary', becuman 'happen', behofian 'behave', fremman (fremian) 'benefit', gebyrian 'be fitting, behave, happen', (ge)dafinian 'be fitting', (ge)lican 'like', (ge)limpan 'happen', (ge)liatan 'list', (ge)lustfullian 'dalight', genihtsumian 'suffice' gerisan 'befit', (ge)tweon 'doubt' geþyncan 'seem good', hreowan 'repent', hyngran 'be hungry', mætan 'dream', ofhangian 'be inconvenient', ofþyncan 'displease', onhangian 'be convenient', tidan 'happen', þyncan 'seem', þyrstan, 'thirst,' etc. このほかに beon と結びついて impersonal statement をしばしば作る形容詞の一端を示すならば次のとおりである。æþriet 'troublesome', betst 'best', earfoð 'aifficult', eaðe 'easy', geomor 'sad', god 'good', hefig 'heavy, difficult', langsum 'tedious', lað 'loathsome', leof 'dear, pleasant', nyttwierðe 'useful', riht 'right', sar 'grievous', softe 'comfortable', sorhlic 'grievous', wundorlic 'wonderful', etc.

ME における impersonal verbs のうち、ModE には残らなかったものを若干示すならば次のとおりである。

athink 'repent', begon 'befall', birewe 'repent', burien (byren) 'be fitting, behave', game 'please', limpe 'happen', merveille 'marvel', minne 'remind', ofthinke 'seem not good, displease', tharf 'be needful', wrathe 'anger', etc.

ModE にも用いられるものを若干示せば次のとおりである。

ail, avail, become fit', befall, beseem, betide, boot, chance, chagre 'be incumbent upon', concern, dislike, displease, doubt, dream, fail, fit, forthink 'regret, grieve', grieve, happen, hunger, import, irk 'grieve, vex', joy, lack, like, list, long 'suit, concern', love, matter, mete 'dream', meseems, methinks, mishap, need, need is (e.g. if need be <if[it] be need. cf. Mätzner, Eng. Gram., Zweier Theil, seite 207), please, pity, reckon, regard, remember, repent, rue, seem, shame, smart 'be sore', speed, suffer, suffice, thirst, tickle, tide. want, woe is, etc.

注 (2) Beowulf のなかにも noun を subject とする impersonal statement が散見する。

- (1) 626 : hire se willa gelamp, ... (=the desire happened to her... i. e. her desire was fulfilled, ...)
- (2) 639 : Ðam wife þa word wel licodon, ... (=These word pleased the lady well, ...)
- (3) 928-9 : Alwealdhan þanc lungre gelimp ! (=Thanksgiving at once happen to the Almighty!)
- (4) 1854-5 : Me þin modsefa licað leng swa wel, ... (=The spirit pleases me more as time goes on, ...)
- (5) 2883 : þa hine sio þrag becom, ... (=when the time of hardship came upon him, ...)

(5) 一定の動詞の object として用いられる場合

Callaway (The Infinitive in Anglo-Saxon, p. 28) は、OE の詩と散文において uninflected infinitive, inflected infinitive が一定の動詞の object として用いられていると考えられる場合について調べ、uninflected infinitive の使用例が inflected infinitive のそれに対する比率は、散文におけるよりも詩における方が遥かに高いということ、詩、散文のいずれにおいても、uninflected infinitive の使用例は inflected infinitive のそれよりも圧倒的に多いことを指摘している。もっとも、これは OE における inflected infinitive を noun と解釈するのに極めて積極的な Callaway の陳述であって、彼のいわゆる object としての inflected infinitive のなかには、これを noun とみるよりも adverbial なものを見る方が適当ではないかと思われる場合も往々見受けられるので、このことを斟酌すれば——一定の場合における inflected infinitive を noun と認めるとしても——OE における object としての uninflected infinitive はますます優勢だということになる。

それに uninflected infinitive が後続するか、inflected infinitive が後続するか、ということを経準にすれば、次の三種類の動詞に分類することができる、すなわち、

(1) hatan 'order', lætan 'let', (ge)seon 'see', hieran 'hear', ginnan 'begin'などのように常に uninflected infinitive が後続する動詞

(2) gedihtan 'order', liefan 'allow', ongretan 'understand', witan 'know', gefon 'undertake' などのように常に inflected infinitive が後続する動詞

(3) bebeodan 'bid', bewerian 'forbid', biddan 'bid', findan 'find', geliefan 'believe', ondrædan 'dread', onginman 'begin', secan 'seek', wilnian 'desire' などのように uninflected infinitive, inflected infinitive の両者が後続する動詞

これを極めて概括的に言うならば、これらの動詞はそれらが(代)名詞を支配する場合、(1)の動詞は accusative を支配することが多く、(2)の動詞は dative, genitive を支配することが多く、(3)の動詞は accusative, dative, genitive の double regimen ないし triple regimen の場合が多い。これは uninflected infinitive と accusative の名詞的性格の濃度、inflected infinitive と accusative 以外の cases の副詞的性格の濃度の照応を示しているものということができる。

次に finite verb と objective infinitive との語順から見た関係であるが、uninflected infinitive だと inflected infinitive だとを問わず、objective infinitive が post-position を占めるのが普通であって、Beowulf においても objective infinitive が pre-position を占める比率は極めて小さい (e. g. ll. 182, 355, 540-1, 674, 739, 963-4, 1445, 1535, 1746, 2371-2, 3095, etc.)⁽¹⁾ これを概論すれば、inflected infinitive よりも uninflected infinitive の方が pre-position を占める率が大きく、uninflected infinitive が pre-position を占める率は散文におけるよりも詩における方が大きいのであって、これは uninflected infinitive がしばしば alliterative letter をもつものとして利用されることに

Beowulf に見える Infinitives

起因するものと考えられる——例えば Beowulf 182 : ne hie huru heofena Helm *herian* ne cuþon, ... (=nor, indeed, had they learned to worship the Protector of the neavens, ...) / Ib., 3095: worn eall gespræc gomol on gehðo, ond eowic *gretan* het ... (=the old man said many things in his distress, and told to greet you...)

Beowulf に見える objective uninflective infinitive を支配する動詞としては、感覚、命令、許可、開始などを表わす動詞の外、意志、欲求、決心、能力などの mentality を表わす動詞を挙げることができる。いま動詞別に一、二の例を挙げるならば次のとおりである。

1 *hyran* 'hear, hear of'

38 : ne hyrde ic cymlicor ceol *gegyrwan* (= I have never heard fit out a ship) / 273 : we soþlice *secgan* hyrdon, ... (=we truly heard say, ...) / also 875.

2 *geseon* 'see'

229-231 : *geseah* weard...*beran*...*beorhte* randas, ... (=the watdman saw [them, i. e. the people of the Geats] carry bright shields, ...) / 1023-4: *mære* maðþumsw-eord manige *gesawon* beforan beorn *beran*. (=many saw bear the glorions sword of honour before the hero.)

3 *hatan* 'order'

198-9 : Het him yðlidan godne *gegyrwan* ; (= [He] ordered to equip a good ship for him ;) / 674 : he... *gehealdan* het hildægeatwe. (=he bade [him, i. e. the retainer] guard the war-equipments.) Also ll. 391, 1035-6, 1053-5, 1114-5, 1807-8, 1920, 2152, 2190-1, 2337-9, 2892, 3095, etc.)

4 *onginnan* 'begin'⁽⁴⁾

100-101 oð ðæt an ongan fyrene *fremman*... (=until a certain one began to compass deeds of malice...) / 244-5 : No her cuðlicor *cuman* ongunnon lindhæbbende, ... (=No strangers have ever begun to come here more openly, ...) Also ll. 871-2, 1605-7, 1983-5, 2044-5, 2112-3, 2210-1, 2312, 2701-2, 2711-3, 2790-1, 2878-9, 3143-4, etc.)

5 *gefrignan* 'learn by inquiring, hear of'

74-6 : Ða ic wide gefrægn weorc *gebannan* manigre mægþe geond þisne mid-dangeard, folcstede *frætwan*. (=Then I heard to order the work far and wide to many a nation throughout this earth, to adorn the people's hall.)⁽⁵⁾

6 *þencan* 'think' mean, intend'

355 : ðe me se goda *agifan* þenceð. (=which thc noble leader intends to give me.) / 540-1 : wit unc wlð hronfixas *werian* þohton. (=we two thought to guard ourselves against whales.) Also 739, 963-4, 800-1, 1535, etc.

7 myntan 'intend'

712-3 : mynte se manscaða manna cynnes sumne *bcsyrwan*... (=the wicked foe intended to entrap one of the race of men...) / 762 : mynte se mæra...widre *gewindan* ... (=The infamous creature intended to slip farther off...)

8 wennan 'hope, expect'

932-4 : Ðæt wæs ungeara, þæt ic ænigra me weana ne wende to widan feore bote *gebidan*, ... (=It was but now that I expected not ever to see a remedy for any of my troubles, ...)

9 fundian 'desire'

1819-20 : we fundiaþ Higelac *secan*. (=we desired to go to Hygelac.)

10 gehycgan 'resolve'

1988-9 : þa ðu...gehogodest sæcce *secan*, ... (=when thou resolved to seek a feud, ...)

11 cunnan 'know how to, be able to'

50-1 : Men ne cunnon *secgn* to soðe, ... (=Men cannot say truly, ...) / 90-1 : Sægde se þe cuþe frumsceaft fira feorran *reccan*, ... (=He who could recount the first making of men from distant ages spoke, ...) Also ll. 182, 1445, 1746, 2371-2, etc.

注 (1) 同一の sentence において二つの uninflected infinitive が共通の finite veb の前後にそれぞれの位置を占めている例としては, Beowulf 800-1 : ond on healfa gehwone *hearwan* þohton, sawle *secan* : (=and thought to hew at him on everyside end to hunt out his soul :)

注 (2) cf. ModE hearsay, make-believe. このような形は, infinitive の logical subject である accusative が indefinite な generic person であるか, または, context から見て分明であるため省かれたものと見られるべき場合 (e.g. Beowulf, II. 229-231, 671-4 cited above) もあるけれども, OE におけるいわゆる accusative with infinitive construction の発達過程から見て, このような形は accusative の省略されたものと見るよりも, むしろ, このような形こそ accusative with infinitive construction の源流を成するのではないとも考えられることは, 次項(6)で述べるとおりである。

注 (3) このように infitive が tr. verb であって accusative の object (上述の例の *beorhte randas*) をとる場合, この accuative を infinitive (上述の例の *beran*) の logical subject と解し, active form の infinitive は passive の meaning を有するとの見解をとる学説も多い (e.g. Zeitln : The Accusative with Infinitive and Some Kindred Construction in English, pp. 44-5, Kellner : Zur Syntax des Englischen Verbuns mit Bcsonderer Berücksichtigung Shakespeares, pp. 85, 97)

注 (4) OE においては *onginnan* が ModE の begin の意味に用いられると同時に, 時には pleonastic なこともあることは周知のところである。cf ME *gan*, *can*, *con*.

注 (5) *frætwan* 'adorn' は *gebannan* 'order' の object として, 同じく *gebannan* の object である *weorc* 'work' と appositional な関係にあると解せられる。ただし Klaeber は *weorc gebannan* を一体として *hatan* 'oder' の意に解し, *frætwan* をその object と見ている。しかしながら, accusative with infnitive が noun と appositional な関係に立って, 共通の finite verb の object として用いられている Beowulf の用例から見ても, infinitive が単独が場合もそれを appositional infinitive と

見て差支えはないと考えられる。accusative with infinitive の場合としては、ll. 1431-2 : *bearhtm ongeaton, gudorn galan*. (= [they] heard the noise, the war-horn sound.), ll. 784-6 : *anra gehwylcum þara þe of welle wop gehyrdon, gryreloð galan Godes andsacan*, ... (=to every one who heard the shrieking from the wall, the adversary of God chant his terrible song, ...) などを挙げることができる。

(6) Verb の object としての、いわゆる Accusative with Infinitive を形づくる場合。

(pro) noun の accusative が infinitive と結んで論理上主述関係を成すいわゆる accusative with Infinitive が一定の動詞の object, すなわち, (I) commanding, (II) causing and permitting, (III) sense perception, (IV) mental perception, (V) declaring を表わす動詞の object として用いられる construction がゲルマン諸語に固有なものであるか、または Latin の影響によるものであるかについては、今日その native idiom であることを肯定する見解の方が優勢なようであるが、それらの諸説について評論することはしばらく措き、これを Anglo-Saxon について見るに、文献に現われた上述の各 group の諸動詞につき個別的にこの construction と認められるべき用例を蒐集し、その場合、(1)当該文献が Anglo-Saxon の native な詩、散文であるかどうか、(2) Latin の prose translation である場合には、Anglo-Saxon のこの construction が Latin originals における Accusativus cum Infinitivo の direct translation としてのみ用いられているのか、Latin originals におけるその他の constructions に照応するものとして用いられているのかを確めながら、各個の動詞について Anglo-Saxon におけるこの construction が Latin originals における Accusativus cum Infinitivo の direct translation としてのみ用いられているのか、Latin originals におけるその他の constructions に照応するものとして用いられているのかを確めながら、各個の動詞について Anglo-Saxon におけるこの construction の固有性を調べてみるに、これを肯定的に解すべき場合が極めて多いように考えられる。これを概言すれば、上述の (I), (III) の groups の動詞にあっては Latin の影響が少く、(II), (IV) の groups の動詞にあっては Latin の影響がかなり認められ、(V) の group の動詞にあっては全く Latin の direct translation の場合にのみ accusative with infinitive construction が用いられている。もっとも OE において固有的にこの construction の形式が用いられているということと、この construction の形式が当該の場合に如何なる言語意識を以て用いられたかということは、自ら別問題であって、ModE におけると同様、同じく finite verb+accusative+infinitive の形式が用いられていても、finite verb の種類によって、accusative と infinitive との結び付きの程度には強弱があり、ある場合には accusative は finite verb の object であり、infinitive は adjunct であると解せられ、またある場合には accusative と dative とが形態上判別不可能なために、finite verb が indirect, direct の two objects をとっていると解せられることもあるのである。この結び付きの程度は、例えば OE に固有的に accusative with infinitive の形が用いられていると認められることの多い (I), (III) の groups の動詞において弱

く、この形が全く Latin の影響によるものと認められる (V) の group の動詞において強いのであるが、この事実を、例えば *hatan* 'order', *hyran* 'hear' というような (I), (III) の groups の動詞の後には accusative with infinitive の形がつづく場合も勿論あるが、accusative を欠いた infinitive のみが finite verb の object としてつづく用例の方が遥かに多いという事実 (Beowulf においても *hatan* の場合14回, *hyran* の場合4回) と併せ考えると、ここに OE おける accusative with infinitive の形式の origin が求められるのではないかと思われる。すなわち、OE における accusative with infinitive の形は finite verb+infinitive の形にその起源を發し、たまたまそれに accusative が加って finite verb+accusative+infinitive の形をとることがあっても、その accusative はむしろ finite verb の object として意識せられたものが、次第に Latin の影響によって、infinitive の論理的な subject と意識せられる度合が強まって来たのではないかと思われる。

ところで、OE における finite verb, accusative, infinitive の word order から accusative と infinitive との結び付きの強弱の程度を見ることはできないであろうか。

(1) f+a+i この形が普通であるが、たまには次の(2), (3), (4)のような word order が見られる。

(2) a+i+f この形は finite verb の位置が異なるだけで、accusative と infinitive は主述の順序で直接しているのであるから、accusative+infinitive に関するかぎり、これを以てその結び付きの強弱の程度を云々することはできないであろうし、また、常に従節において finite verb が節尾に位置する場合である。この形の用例を Beowulf に求めるならば次のとおりである。

1345 : Ic þæt londbuende, …*secgan* hyrde, þæt …(=I heard dwellers in the coutry say this, that…)

1414-5 : oþ þæt he …*fyrgenbeamas* ofer harne stan *hleonian* funde … (=till he found mountain-trees hang over a grey rock, …)

2022-3 : þa ic Freaware fletsittende nemnan hyrd, … (=when I heard those sitting in hall call her Freawaru, …)

(3) f+i+a これは f の位置は(1)と同じであるが accusative と infinitive の位置が逆になっている形である。この場合も accusative と infinitive の位置が逆になってはいるが直接していることは(1)と変りはないのであり、また、主述の位置が逆になることは、同じく二語が sense unit をつくるいわゆる absolute participial construction においても present (or past) participle+(pro)noun の形が時には見られるのであるから、accusative と infinitive の逆置を以て両者の結び付きの程度を云々することは当らないであろう。この形は *lætan* 'let' というような causative の動詞の場合に比較的多いのであって (e.g. *Ælf. L.S.* 18.147, *Ib.*, *Hept. Ex.* 9.24, *Ib Lev.* 1.15, *Læce* 12.2, etc.),

Beowulf に見える Infinitives

この場合においては ModE においてもそうであるように (e.g. let go, let be, let fall, etc.), finite verb と infinitive とが一つの sense unit をつくり, その後に accusative の object を従えるものと見ることもできるであろう。この形の用例を Beowulf に求めるならば次のとおりである。785-6 : þe...gehyrdon, gryreleð *galan Godes andsacan*, ... (=who ... heard the adversary of God chant a terrible song, ...) / 864-5 : heþorof ... leton ... on geflit *faran fealwe mearas*, ... (=famous warriors...let...their bay horses run races, ...)

(4) a+f+i, i+f+a, これらは accusative と infinitive とが finite verb によって両断分離せられた形である。これらの場合には accusative と infinitive とか分離せられるだけに, 両者の結び付きの程度が——OE の, 殊に verse にあっては, word order のみを以て一定の construction の性格を云々することは危険であるけれども——弱い場合があるのではないかと思われる。殊にこの word order は accusative+infinitive が正常に finite verb に後続する場合でも, accusative と infinitive との結び付きの程度が弱い種類の finite verbs の場合に多く見られることから, そのことが察せられる。すなわち, この word order は *hatan* 'order', *geseon* 'see', *gehawian* 'see', (ge)*hieran* 'hear' のような, 上述の (I), (III) の groups の finite verbs の場合に多く見られ, また, (on) *findan* 'find', *ongietan* 'perceive', *gefringan* 'learn by inquiry, hear of' のように, 上述の (IV) の group の mental perception の finite verb であっても, (III) の sense perception の verbs とその性格の差が紙一重の finite verbs の場合に多く見られるのである。この word order の用例を Beowulf に求めるならば次のとおりである。

(I) 293-6 : ic *maguþegnes mine* hate ... *flotan eowerne ... healdan*, ... (=I order my comrades guard your ship, ...)

(III) 2767 : he *siomian* *geseah segn eallgylen* ... (=he saw a standard all of god's hang ...) / 3127-8 : *ænigne dæl* *secgas* *geseon on sele wunian*, ... (=the warriors saw any part [of it] remain in the hall, ...)

(IV) 2841-2 : gif he *wæccende weard* *onfunde buon* on beorge. (=if he found the guardian dwell watchching on the mount.)

Beowulf に見える accusative withinfinite が finite verb の object として用いられている用例を, finite verb の group 別に示せば次のとおりである。

(I) *hatan* 'order', ll. 67-9, 293-6, 386-7, 1045, 1868-9, 2802, 2812.

(II) *lætan* 'let, allow', ll. 48, 397-8, 864-5, 1488-90, 1728-9, 1994-7, 2389-90, 2550-1, 2977-80, 3079-82, 3132-3.

(III) *geseon* 'see', ll. 221-2, 229-30, 728-9, 1347-8, 1425-6, 1431-2, 1585-6, 1662-3, 2455-6, 2604-5, 2756-8, 2767-8, 2822-4, 3038-40, 3127-8. / (ge)*hyran* 'hear', ll. 582, 784-6, 1345-6, 1842-3 / *ongitan* 'hear', ll. 1431-2

(IV) findan 'find', ll. 118-9, 1267-8, 1414-5, 2270-1, 3033-4 / onfindan 'find',
ll. 2841-2 / gefrignan 'learn by inquiry, hear of', ll. 1011-2, 1027-9, 2484-5,
2694-5, 2752-4, 2773-4.

最後に注意すべきは、次のように infinitive を欠いだ形である、すなわち、
617 : bæd hine bliðne ... (= [she] bad him joyful ...)

2455-6 : Gesyhð ... on his suna bure winsele westne, ... (= [he] sees in his son's
dwelling the festival waste [i. e. abandoned], ...)

このような finite verb+accusative+adjective, participle, etc. の形は、Zeitlin (The
Acc. with Inf. and Some Kindred Constructions in English, p. 110) が—— verbs
of declaring, verbs of mental perception に関してではあるが——それから Acc. with
Inf. の形が生起発達した原型と見ているものである。ともあれ、この場合 infinitive を
欠いたままで、accusative と adjective, etc. との間に、例えば全く Latin の模倣から発
達した⁽²⁾いわゆる absolute participial construction において participle を欠く場合のよう
に、一つの nexus をつくる程度の結び付きは、これを認めることができるであろう。

注(1) 例えば Onions : An Advanced Eng. Sntax は p. 8 で 'Conscience bids me speak' を動
詞が two objects をとる例として挙げる一方、p. 67 では acc. with inf. の例として 'Bid me do
anything for you' という例文を挙げている。また、Jespersen : Essentials of Eng. Grammar は
p. 332 で 'He never allowed any one to shoot on his ground' を動詞が two objects をとる例として
挙げると同時に、この construction を infinitival nexus の construction と区別することは不可能だと
remark して、同じ sentence を p. 340 で infinitival nexus の examples の一つとして挙げている
(allow に関しては Onions, p. 123³ もまた、'Allow me to pass' という sentence は 'Allow me
passage', 'Allow that I pass' の二つの解釈が可能だとしている)。

注(2) absolute participial construction において participle を欠いた文例を挙げるならば次のとおり
である。you a brother of us, It fits we thus proceed, ...— Shaks., Henry VIII, V. i. 107 / Joy
absent, grief is present for that time. — Ib., King Richard II, I, iii. 259 / all loose her
negligent attire, all loose her golden hair, Hung Margaret o'er her slaughter'd sir. — Scott, The
Lay of the Lost Minstrel, I, x, ll. 1-3.